

子供たちの未来へ先送りできない

# 「電気のがみ」を知っていますか？

原子力発電に伴って、放射能レベルの高い廃棄物が発生します。その安全な処分については、電気を使って豊かに暮らす私たちが、責任を持って考えなくてはならない問題です。それを一人でも多くの方に知ってもらおうと、フリーアナウンサーの江口ともみさんが、名古屋大学の吉田英一先生と、エネルギー問題に深い関心を寄せるアルビニストの野口健さんにうかがいました

構成：佐塚潤子 撮影：佐々木辰生 デザイン：株式会社ラララコミュニケーションズ

すでに存在する原子力発電のごみの安全な処分方法とは？

江口 どんな問題を考えているうえで大切なのは、正確な情報から正しい知識を得ることだと思います。そこでまず、原子力発電のごみの現状と処分方法について教えてください。

吉田 原子力発電で使い終わった燃料は、何らかの処理・処分をしなければなりません。日本では、これを化学的に処理して、再利用できる成分はリサイクルすることになっていますが、どうしても利用できない廃液は処分しなければなりません。具体的には、高温の融けたガラスと混ぜ合わせて、固体にして処分します。これを「ガラス固化体」と呼んでいます。直径約40センチ、高さ約一三〇センチ程度の円筒形のもので、

すでに存在しているのですから、その事実を冷静に受け止め、最善の解決策を皆で考える必要があると思います。

データによる安全性を示すことはもちろん大事ですが、難解でわかりにくい部分もあります。地下に埋めると聞く、どうしても怖いという感情を持ってしまいますよね。そういう

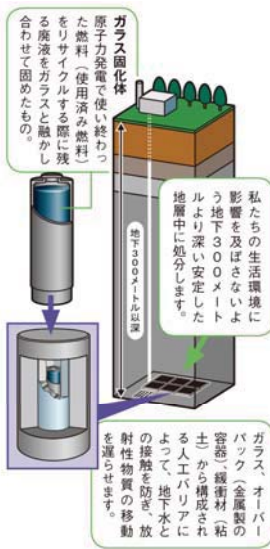
う漠然とした不安を解消できるような、誰にでもわかりやすい説明が必要だと思っています。

吉田 実は、そのための興味深い事例があります。一九九五年にスコットランドで、約二〇〇年前にローマ軍が地下に埋めた数万本の鉄くぎが発見されましたが、そのほとんどは腐食が進んでおらず、今でも建築

すでに約二万五〇〇〇本相当(※)発生していることになり。放射能による人体への影響が十分に小さくなるまでには、数千年以上の長い時間がかかります。これを安全に処分することが、原子力を利用するすべての国で課題になっています。いま国際的に最も信頼性の高い方法として選択されているのが、地下深くに埋める「地層処分」です。宇宙や海洋、南極の水床への処分が検討されましたが、いまは地層が持つ性質を物質を閉じ込める性質を利用する地層処分が最も良いとされています。江口 富士山やエベレストのごみ問題にも取り組んでいらっしゃる野口さんは、原子力発電のごみや地層処分についてはどう考えていますか？

野口 原子力発電に対してはさまざまな意見がありますが、そのごみは

## ガラス固化体の地層処分



出典 原子力発電環境整備機構

### 吉田 英一

名古屋大学博物館資料分析系准教授を経て、現在、名古屋大学博物館教授。専門は応用地質学・環境地質学。総合資源エネルギー調査会核燃料循環部「エネルギー・コンクリート委員」



### 江口ともみ

現在はフリーランスとして活動中。ラジオパーソナリティ、編集、CMや企画演出、セミナーなど幅広く活動中。



### 野口 健

1969年、愛知県大府市生まれ。早稲田大学環境学専攻卒業。その後、テレビや富士山の「ごみ清掃活動」の環境問題に取り組み、著書に「自然と人と人間」など。



に使えるほどでした。このことから、地下環境がものを安定的に維持する特徴があることがわかります。また、東日本大震災の際には、東北にある石油備蓄基地で、地上施設はほぼ全壊したのに対し、地下約三〇メートルにある岩盤を利用した石油備蓄施設には、ほとんど影響がありませんでした。

野口 地下の地層が埋められた物質を何千年も守り、大震災の揺れにも耐えるような自然の力を秘めていたとは驚きです。そうしたエピソードには、科学的データ以上の説得力がありますね。

今の私たちに課せられた  
将来世代への責任を果たす

江口 日本では地層処分の場所がまだ決まっていますが、地震や火山活動の影響も心配ですし、処分地選定のプロセスは、誰もが納得できる方法でなければなりませんね。

吉田 処分地を選ぶために、地域の理解を得ながら段階的に詳しい調査を行っていくことが法律で決まっています。しかし、これまで調査に入っていないのです。そこで、国が「科学的有望地」を提示して、その後の調査で安全性が確認できると期待される地域を大まかに示そうとしてい

ます。日本地図を色分けして示される予定ですが、多くの方が懸念する火山活動や活断層のほか、隆起、地温といった地質学的現象の影響などを考えて色分けしようということが議論されています。

野口 まずは、自分たちがどういう地質環境に暮らしているかという情報の共有からはじめるわけですね。そのうえで、処分地を選定していく段階では、さまざまな意見の対立もあると思いますが、そこで大切になるのが人と人との信頼関係です。これは環境問題でも同じです。僕は、

小笠原諸島の環境保護に取り組み際、観光開発を望む地域との調整役を果たす「東京都レンジャー」制度を創設しました。島に派遣されたレンジャーたちは、実際に島民の方々と一緒に暮らし、納得できるまで何度も話し合い、共生の道を見出し、いきました。地層処分においても、情熱を持った担当者が地域に根ざした活動を続け、長い時間をかけて信頼関係を構築していく必要はないかと思えます。そしてもちろん、国民一人ひとりがこの問題を自分ごととして考えていけるよう、根気強い対話を活動も続けることも大事です。

江口 理解と信頼関係を全国に広げて、調査を受け入れてくださる地域

を国全体で応援していくことも大切ですね。

吉田 そのために、ぜひみなさんに地層処分への興味を持っていただきたいのです。興味を持っては多くの情報に触れることができる、そこから疑問点や不安が生じることもあるでしょう。そういう声に丁寧にお応えし、信頼できる情報をわかりやすく発信していくことが、専門家である私たちの役割だと思っています。

野口 環境も地層処分の問題も、今の自分たちに直接影響がないと、なかなか危機感を持っていないものです。しかし、人体への影響が十分に小さくなるまでに長い時間がかかる廃棄物を生活環境の中に置いたまま、次の世代に残すリスクを想像してみてください。これから長い時間をかけて行われる対話活動のなかで、あらゆる工夫と努力を積み重ねながら、この事実を伝えてほしいと思います。

江口 快適な生活の恩恵を受ける私たちに、それにもなう責任があります。だからこそ、この問題でできる限り多くのおみなさんにお伝えし、これからも一緒に考えていきたいと思っています。本日は本当にありがとうございました。